# 「現場」に基づく国境研究により紛争地域の平和と安定を目指す

北海道大 スラブ研究センター 岩下明裕研究室

世界の至るところで国境や境界を巡る紛争が起こっている。海に囲まれた日本も無関係ではなく、北方領土、尖閣諸島、竹島などで国境問題を抱えている。関係各国との間には国益、国民感情、歴史的解釈など多くの課題があり、解決の道筋は見えていない。そうした国境問題に解決の糸口を見いだそうとしているのが、岩下明裕教授が取り組む「ボーダースタディーズ（境界研究）」だ。政府の外交だけでなく、境界に接する地域の動向にも注目し、徹底した現場主義で国境問題にアプローチしている。

## フローチャートで分かるボーダースタディーズ

### 大学院生の主な出身分野

- 政治学
- 国際関係学
- 歴史学
- 文化人類学

など

◎スラブ研究センターにかかわる大学院生の専門は、政治学、国際関係学、歴史学、文化人類学など多領域にわたる。出身国も中国、韓国、ロシア、チェコ、カザフスタン、ブラジルなど東アジアやスラブ圏、南米までと幅広い。

### 研究にかかわる学問分野と研究内容

◎「ボーダースタディーズ」は、国際関係学や地理学、政治学などの知見を土台として、境界領域の「現場」の目線で国境・境界を巡る紛争の解決や地域の安定を目指す学問分野だ。上記の他には、地球環境学など自然科学の知見も必要である。

### 研究成果と社会のかかわり

- 国内・東アジアにおけるネットワークづくり
- 政策提言
- 教育・啓蒙活動

など

◎紛争地域の平和・安定を目指し、国内外の国境問題を共有しながら解決を図るネットワークづくり、政策提言、学術誌の発行、北海道大総合博物館の展示、各地域の関係者を招いたフォーラム開催など、研究成果を幅広く社会に還元している。

## 常識を疑う大胆さと事実から論理を構築する力が必要

**ボーダースタディーズが求める学生像**

常識を疑う姿勢

事実を論証する力　地道に資料を集める根気強さ

ボーダースタディーズでは、今まで他の人が気付かなかったことを見抜き、事実を基にそれを証明することが求められます。そのためには、「常識」と言われていることに疑いの目を向けることです。大学の勉強でも、基本的なことを覚えたり理解したりすることは必要ですが、人とは違う研究成果を出したいなら、全く違うアプローチを模索しなくてはなりません。

例えば、国境の研究についても、「北方領土は日本固有の領土である」という意見にとらわれていると、「4島すべてを返してもらわなければいけない」と思い込んでしまいます。しかし、日本は最初から4島返還を主張していたわけではありません。そもそも「固有の領土」という考え方自体、法的・歴史的裏付けのない曖昧な定義に過ぎないのです。

更に、境界研究では、係争地に住む人々の意見や言説の違いなどを丹念に拾い集める根気強さも必要です。そして、研究成果として世に問うためには、探し集めた事実を系統立て、論理的に組み立てる構築力も必要です。既存の枠組みを壊した先に、誰も見たことのない真実の姿が見えてくるのです。

**高校生へのメッセージ**　高校時代は他人の目を気にしすぎず、自分が楽しいと思ったことをとことん追求してください。周囲に迎合して簡単に意思を曲げるようなことはせず、たとえそう考えるのが自分一人でも考えを主張し続ける勇気も持ってほしいですね。

**岩下明裕**　教授　Iwashita Akihiro

北海道大スラブ研究センター教授。北海道大グローバルCOEプログラム拠点リーダー。九州大法学部卒業、九州大大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。九州大助手、山口県立大助教授、北海道大助教授、ブルッキングス研究所北東アジア政策研究センター客員研究員等を経て現職。第6回大佛次郎論壇賞、第4回日本学術振興会賞を受賞。主な著書に『北方領土問題　4でも0でも、2でもなく』（中央公論新社）などがある。


### 研究を志したきっかけ

## アジアの民主化に刺激を受けて境界研究に取り組む

学生時代は法学部でソ連の政治史を研究していました。さまざまな矛盾の中、社会主義がまだ存在していた時代で、興味深い研究対象でした。

しかし1980年代半ばから、日本やアジアを取り巻く情勢は大きく変わりました。85年にソ連でゴルバチョフが書記長に就任し❶ペレストロイカが始まり、87年には韓国で盧泰愚（ノテウ）大統領候補による❷民主化宣言がありました。日本周辺国の民主化の進展と社会主義の崩壊は衝撃でした。また国際化が進み、当時住んでいた福岡でも多くの外国人を見るようになりました。85年の❸プラザ合意以降、円高により日本から海外に行きやすくなったことも大きな変化でした。そして90年代初めにソ連が解体、中国では❹改革開放が加速し、社会主義市場経済が急速に進み始めます。

こうした世界の変化に触発されて国際関係への関心が高まり、私は❺中国とロシアの国境問題の研究を始めました。それまで、国際関係学といえば国家間の研究が主軸でしたが、私が重視したのは国境を接する地域の視点です。日本のように国土が海に囲まれているとあまり意識しませんが、陸続きの国々では、国の力関係もさることながら、国境を接する地域間の関係も国境問題を大きく規定するのではないかと考えたのです。

### 研究内容

## 中ロ国境問題の解決プロセスを北方領土問題に応用

国境問題を考える時、「境界」にある地域の情報は欠かせません。しかし、当時は、日本で外国の一地方に関する情報はなかなか得られませんでした。そこで、私は何度も中ロのボーダーとなっている地域を訪れ、地元紙や地方誌を集め、現地の行政関係者や新聞社などにインタビューして情報収集に努めました。すると、各地域の立場や主張の違いなど、モスクワと北京の政治を見ているだけでは分からない、さまざまな事情が見えてきました。

この成果をまとめた書籍を出版した直後、解決が困難とされていた係争地を中ロ両国で分け合う協定が成

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

立し、中ロの国境問題は解決に向かいました。最終的に両国が大胆な妥協をし、係争地を五分五分で分け合うことに合意したのです。現地での調査時にある程度予兆をつかんではいましたが、世界中を驚かす衝撃的な出来事でした。

私は、この国境問題解決のプロセスを、日本の北方領土問題にも生かせないかと考えました。中ロ国境画定の過程を丁寧に検証し、北方4島や根室を訪れて現地調査を行いました。その結果、私は、これまでの諸説ではなく、「2島プラスα」[6]が解決の糸口になると考えています。

北方領土の問題は、政治だけを見ていたのでは気付かない、大きな問題をはらんでいます。北方領土問題の講演会で、しばしば「稚内とサハリンは交流があるのに、なぜ根室は北方4島と付き合えないのか」と質問されます。稚内とサハリンは国境が決まっているから付き合えるのです。しかし、北方領土は国境が画定していないから、根室とは自由に経済活動も交流も出来ない。この状態が60年以上も続き、根室の人々は疲れきっています。ところが、政治家や国民の多くはこれを知りません。

日本の国境問題は北方領土の他に、韓国との竹島、中国との尖閣諸島の問題があります。「日本固有の領土だから領土問題はない」として対応を怠っていては何も解決しません。領土問題に起因する紛争の予防、境界画定への道筋を考えることも、ボーダースタディーズの重要な役割なのです。

研究の展望

## 世界の研究機関とのネットワークにより研究成果を共有

現在、我々は与那国島や対馬など境界を接する自治体や、国境問題を研究する世界の研究機関とのネットワークをつくっています。各地の国境問題を比較検討することで、それぞれの問題解決のヒントを見いだすことを目指しています。

異なる国境問題を比較することが、我々にとってどのような意味があるのかと疑問を抱く人もいるかもしれません。しかし、こんな例があります。一時期、対馬に韓国人の観光客が大挙して押し寄せて、日本のルールを知らない韓国人旅行者が現地の人とさまざまな摩擦を引き起こして問題になったことがありました。これは、ソ連解体後、稚内にロシア人が大挙して押し寄せた時の経験を対馬の人が知っていれば、速やかに解決できたかもしれません。

同じことは諸外国の事例からもいえるでしょう。国や地域によって課題は違っていても、互いに学び合えることはあるはずです。特に隣国と地続きで接する国には、国境問題解決の過程で得た多くのノウハウがあります。世界の研究機関と問題を共有して、国境問題の解決への道筋を見いだし、ゆくゆくはボーダースタディーズの理論化・体系化を目指していきたいと考えています。

写真　中国とパキスタンに狭まれたカラコルム山脈でパキスタンの国境警備隊員に話を聞くフィールドワークの様子

### 用語解説

**❶ペレストロイカ**
ゴルバチョフ主導による政治・経済・社会の改革運動。60年以上続いていた一党独裁の政治体制を変革するため、民主化、市場原理の導入などを推進した。

**❷民主化宣言**
当時、韓国の大統領候補だった盧泰愚が発表した政治宣言。ソウルオリンピック後の民主化を表明した。

**❸プラザ合意**
日・米・英・独・仏が、ドル高是正のために協調介入を行う旨を述べた声明。以降、急激な円高ドル安が進み、日本のバブル経済に発展した。

**❹改革開放**
70年代後半から鄧小平を中心に進められた中国の経済改革。人民公社の解体や外国資本の導入などが行われ市場経済化が進んだ。

**❺中国とロシアの国境問題**
中国・ロシア間の国境問題は、91年に東部国境協定が締結され、04年にタラバロフ島（中国名・銀竜島）、大ウスリー島（中国名・黒瞎子島）、ボリショイ島（中国名・アバガイト島）の帰属について協定が成立した。

**❻2島プラスα**
4島返還を事実上困難であるとし、歯舞群島・色丹島の2島の返還を前提に、国後島・択捉島や周辺海域の付加返還を目指す戦略。

大学院生が語る

# 国境を軸に中央アジアと中国との関係を読み解く

ビタバロヴァ・アセリさん
Bitabarova Assel

北海道大スラブ研究センター
大学院文学研究科修士課程2年
（カザフスタン・クズルージャル高校卒業、国立ユーラシア大学卒業）


**Q なぜこの分野に進んだのですか**

**A** 国際関係に関心を持つようになったのは、私自身の成長と国家の成長が同時期に進んだことと関係があると思います。母国カザフスタンが独立したのは、私が小学校に入学した91年のことでした。政治・経済の改革、ロシアや中国との外交、国境の画定など、国が自立する過程で多くの課題があることを知り、近隣諸国、特に存在感を増す中国への関心が高まりました。

大学では国際関係学を専攻し、中国について研究しました。卒業後は中国に語学留学しましたが、帰国後、海外で国際関係について学びたいという思いが高まり、文部科学省の奨学金制度に応募。中央アジアと中国との関係を学べる当センターで学ぶことにしました。

**Q 現在の研究内容を教えてください**

**A** 中央アジアのカザフスタン、キルギス（＊）、タジキスタンの3国と、国境を接する中国との関係を研究しています。これらの国は中国をどのように見ているのか、中国との関係がどのように議論されているのか、各国の認識、言説の違いなどの比較研究を行っています。

独立後、母国と中国の政治・経済関係は迅速に発展しています。中国はパイプラインで石油を輸入し、同時に安価な衣料品や食料品を大量に輸出しています。キルギスやタジキスタンのインフラ整備などに対する中国の支援や投資も増えました。中国の協力を得て国が発展する一方、影響力の増大を警戒する声が国内で高まっています。通商関係の強化により、政治的な影響力も増大させようという中国の意図を指摘する研究者もいます。中国が国境問題を早々に解決させたのも、3国との通商関係を強化したいという思惑があったからという説もあります。

このように、台頭する中国と中央アジアとの関係を、インターネットや文献などを使って調べていますが、日本で得られる情報は限られているため現地調査も必要です。今後は3国の中で最も情報の少ないタジキスタンを訪れ、資料収集やインタビューなどを行う予定です。

**Q 高校生へのメッセージをお願いします**

**A** 若い時は何よりも目標を持つことが大切だと思います。行き先を決めないまま海に漕ぎ出した船は、大きな波や風が来る度に翻弄され迷い続けます。しかし、明確な目的地があれば、多少波や風が強くても一生懸命に漕ぎ続けられ、いつか目的地に到達できるでしょう。

人生も同じだと思います。日本に来る前は、言葉を覚えられるのだろうか、興味深い研究テーマを決められるのだろうかと不安でいっぱいでした。課題を一つずつクリアしながら、コミュニケーションも取れるようになり、情熱を持って取り組める研究テーマを見つけることも出来ました。目標を定め、それに向かって努力を続けていけば、必ず成功に近づくことが出来ると、私は思います。

## 私の高校時代

### 辛い経験を成長の糧に

●カザフスタンの小・中・高校は、基本的にすべて同じ校舎にあり、内部で進級していく点が日本の学校との大きな違いです。ただ、私は両親の仕事の関係で、何度も転校を経験しました。特に高校3年生での転校は、大きな不安がありました。しかし転校先の先生方が私の不安をしっかり受け止めて、熱心に指導してくださったのです。

私にとって意義深かったのは、転校先でカザフスタンの歴史を改めて学び直し、国際問題に関心を持ったことです。元々理系が得意でしたが、興味深い授業、またクラスメートとのディスカッションを通して、もっと他の国々との関係について知りたいと思うようになりました。転校の経験も、今思えば新しい環境に適応する力を身に付ける上で、良い経験だったと思います。自分の置かれた境遇を嘆かず、前向きに取り組んでいけば、どんな経験も自分の力に出来ると思います。

＊キルギス語での正式名称はKyrgyz Respublikasy（クルグス・レスプブリカス）　＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです